

中央教育審議会大学分科会大学教育部会

初年次教育の現状と課題  
～“移行”問題を中心に～

06. 11. 8

関西国際大学 濱名篤

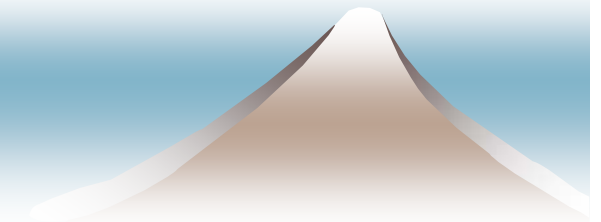


# 1. “移行(transition)”問題とは

## “移行”

「高校から大学へ」「大学から社会人へ」といった、ある発達段階から次の発達段階への転換期において、新しい環境への社会的適応をはかることであり、社会的結合(対人関係)など、いくつかの側面で適合・結合の達成を個人に求めるものである。

その中には、人生観・世界観と新しい環境での調整、目標や動機の獲得、移行後に必要な能力の取得、などが含まれる



## 2-1. 日本の大学生が直面する “移行”問題

- ◆ 大学から社会への移行の困難さ
  - 大学教育のユニバーサル化
  - 大学中退者 11%(OECD 2000)
  - 進路未決定者 14.7%(学校基本調査速報 2005)
  - 大卒後の一時的就業者 3.0%(学校基本調査速報 2006)
  - 大卒後の3年未満離職率 35.7%(厚労省 2005)  
cf. 10年前の93年3月卒業者の24.3%に比べれば11.4ポイント上昇

5割以上が大学から社会への移行の途中で挫折している

## 2-2. 社会への“移行”の際の挫折率 (18~25歳・人社系)

1) 進路未決定者 14.7%【出口】

人文 18.5%

社会 17.1%

工学 7.1%

+

2) 「一時的職業」(フリーター) 3.0%【出口】

人文 4.8%

社会 2.8%

工学 0.7%

(学校基本調査2005速報)

3) 3年以内離職率 35.7% =2003. 3卒業者【ポスト出口】

(厚生労働省職業安定局調査2006)

→ 中退率11%【プロセス】+卒業率89%×(0.23~0.20【出口】)+就職率  
64%×(0.36)【ポスト出口】)

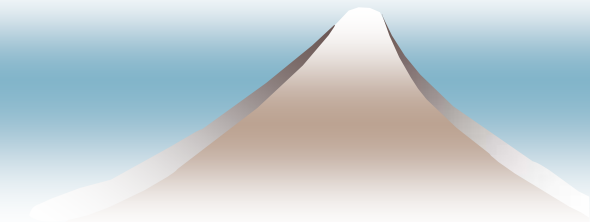
≒ 入学者の50%強が18~25歳の間に“キャリア挫折”

## 2-3. “移行”問題の深刻さ

社会への“移行”時の摩耗率の高さからくる社会問題（少子高齢化と連動した労働力、国際競争力、社会保障、治安などの諸問題）への直結

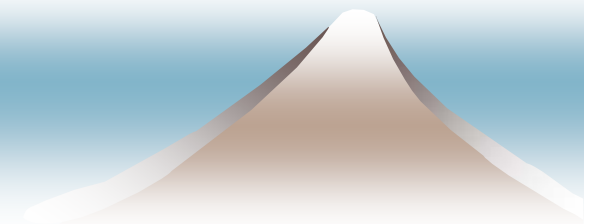


学生本人、大学、家族、政府、卒業生の雇用先等、すべてのステーク・ホルダーの利害と相反



## 2-4. 入学者選抜の改善で“移行” 問題は解決するか？

- 1) 中教審の7つの機能類型自体が想定する高等教育の多様性
- 2) 定員確保・retentionは国公立を問わず深刻化していく→入試のハードルを高くする事に足並みは揃わない
- 3) 高校修了時の「基礎学力到達度」テストの必要性  
選択科目の増加→リメディアルでの対応は困難化  
→アメリカのAO入試はSATという外的基準が保証する(日本のAOには外的基準なし。大学は高校よりリメディアルがうまくやれるのか？リメディアルは高等教育？)  
→高一大の有機的構造化が不可欠



# 3. 大学への適応についての理論枠組み

## ◆ 発達論的アプローチ

Chickering(1969)

「発達の7つのベクトル」

- ①学生と教員のコンタクト促進
- ②学生間での協力機会
- ③能動的な学習手法
- ④素早いフィードバック
- ⑤学習時間の重要さの強調
- ⑥学生に対する高期待の伝達
- ⑦多様な才能と学習方法の尊重

## 社会学的アプローチ

### ◆ Tinto(1975,1987,1993) 「学問的統合

Academic Integration」

「社会的統合

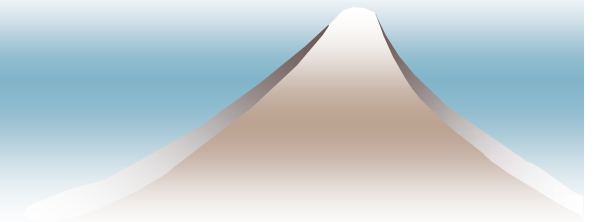
Social Integration」

### ◆ Astin(1970, 1991)

- 「I-E-Oモデル」

Input Environment Output

「関与Involvement」



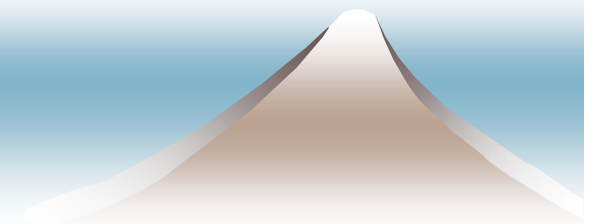
# 4-1. 初年次教育を出発点とする 学士課程教育の再考

初年次教育 (First Year Experience):

「主に大学新生を対象にした、高校からの“円滑な移行”をはかり、学習及び人格的な成長の実現にむけて、大学での学習と生活を“成功”させるべく、総合的につくられた教育プログラム」



- Q1. 初年次教育の有効性は定着しつつあるが、解決すべき課題は「学習適応」だけなのか
- Q2. 初年次教育が成功すれば、問題は解消するのか
- Q3. 教育内容が改善されれば、問題は解決するのか





## 4-2.初年次教育と導入教育(1)

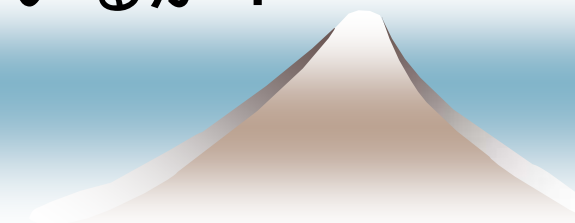
初年次教育:

- ・ 学生をナビゲーションする方向性は、必ずしも一方向でも明確でもないことを想定。
- ・ 大学教育への“円滑な移行(入口から、出口へ)”が目的

汎用的(Genericな内容)重視。人文・社会科学系などに多い

- ・ 正課教育以外も含めた“体験experiences”を含む

入学者のミスマッチが想定されているか？

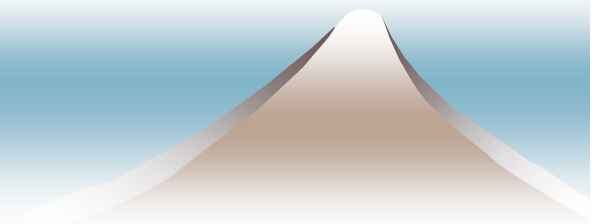


## 4-2. 初年次教育と導入教育(2)

### 導入教育:

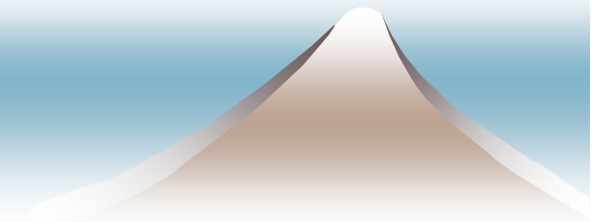
学士課程における到達目標が明確である(ナビゲートできる)という前提に立っている。当該学科の専門教育の到達目標を“ゴール”として、ナビゲーションするという発想。「導入」の後の「発展」「展開」「完成」といった後続くステップが想定。国家資格・免許連動の医・歯・薬、工学などの分野で多用。

専門教育が出発点であり、**専門教育の修得が目標**



## 4-3. 初年次教育は リメディアル教育の一部？

- 「初年次教育はリメディアル教育の一部であると聞きましたか……」(06. 6)  
→No!
- アメリカでは、Remedial Educationから  
Developmental Educationへ移行途上  
Google での検索hit数で 15million:6.3million  
ちなみにFirst Year Experienceは535million  
→市場規模が全く違う
- 概念から、考えても中等教育までのremedialは大学  
教育の単位認定対象外。FYEを単位認定対象とする  
のとは全く異なる。



## 4-4. 初年次教育の内容

- ①大学生活への適応(大学生活、学習、対人関係等)
- ②大学で必要な学習技術の獲得(読み、書き、批判的思考力、調査、タイム・マネジメント)
- ③当該大学への適応
- ④自己分析
- ⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入
- ⑥学習目標・学習動機の獲得
- ⑦専門領域への導入

\* 教育内容だけでなく、教育哲学、ペダゴジーに特徴



# 4-5. 日本の初年次教育の類型

## 類型化の軸

### 1) 方式

単独科目(スタンドアロン)方式—複数科目(プログラム)方式

### 2) 目的

社会適応(Social Integration)

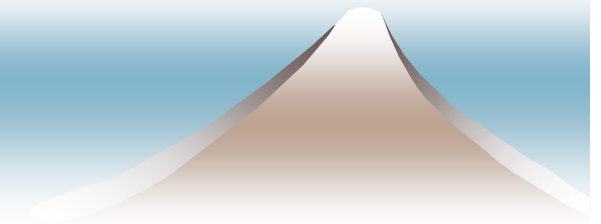
学習適応(Academic Integration)

社会適応・学習適応

### 3) 内容

汎用性重視—専門重視

- ・タイプによって、カリキュラム上の位置づけ(科目数、単位数)、コンセプト、方法論も異なる
- ・少人数教育・Active Learning志向は共通



# 4-6. 総合化が評価を集める 日本の初年次教育

「複数科目、社会適応・学習適応」型への関心度

i) 汎用性重視

例：関西国際大、国際基督教大

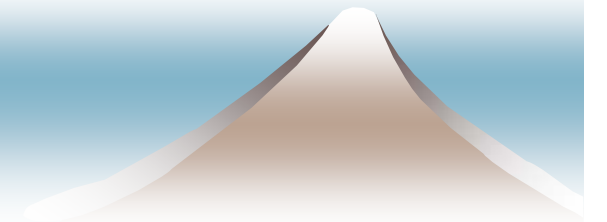
関西国際大の例

①キャリア・プランニング(週2コマ)、②学習技術(週1コマ) ③情報基礎(週1コマ)+④専門概論科目(週2コマ)以上春学期+ ⑤基礎演習(週1コマ) 秋学期

ii) 専門重視

例：金沢工業大

工学設計を中核にした専門重視、複数科目型



# データからみる初年次教育の重要性 (パネル調査の概要)

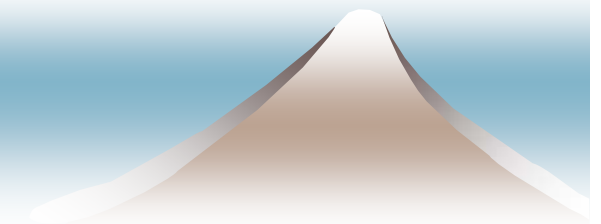
「高等学校から大学への移行と適応過程に関する調査」

- ◆ 実施: 地域高等教育研究会(代表 川嶋太津夫)
- ◆ 方法: 質問紙・直接配布法
- ◆ 対象: 大都市近郊に所在する国私立大学  
5大学 文系学部在學生
- ◆ 時期: 初年次(2003年4・6・10月)  
二年次(2004年12月)  
三年次(2005年10月)
- ◆ 質問項目: 学習習慣・学習経験・学生生活での悩み等
- ◆ 本研究は、日本学術振興会科学研究費(基盤研究B(1)代表:  
濱名篤)の助成を受けている。

# 5-1. 高校から大学初年次への 「適応」状況

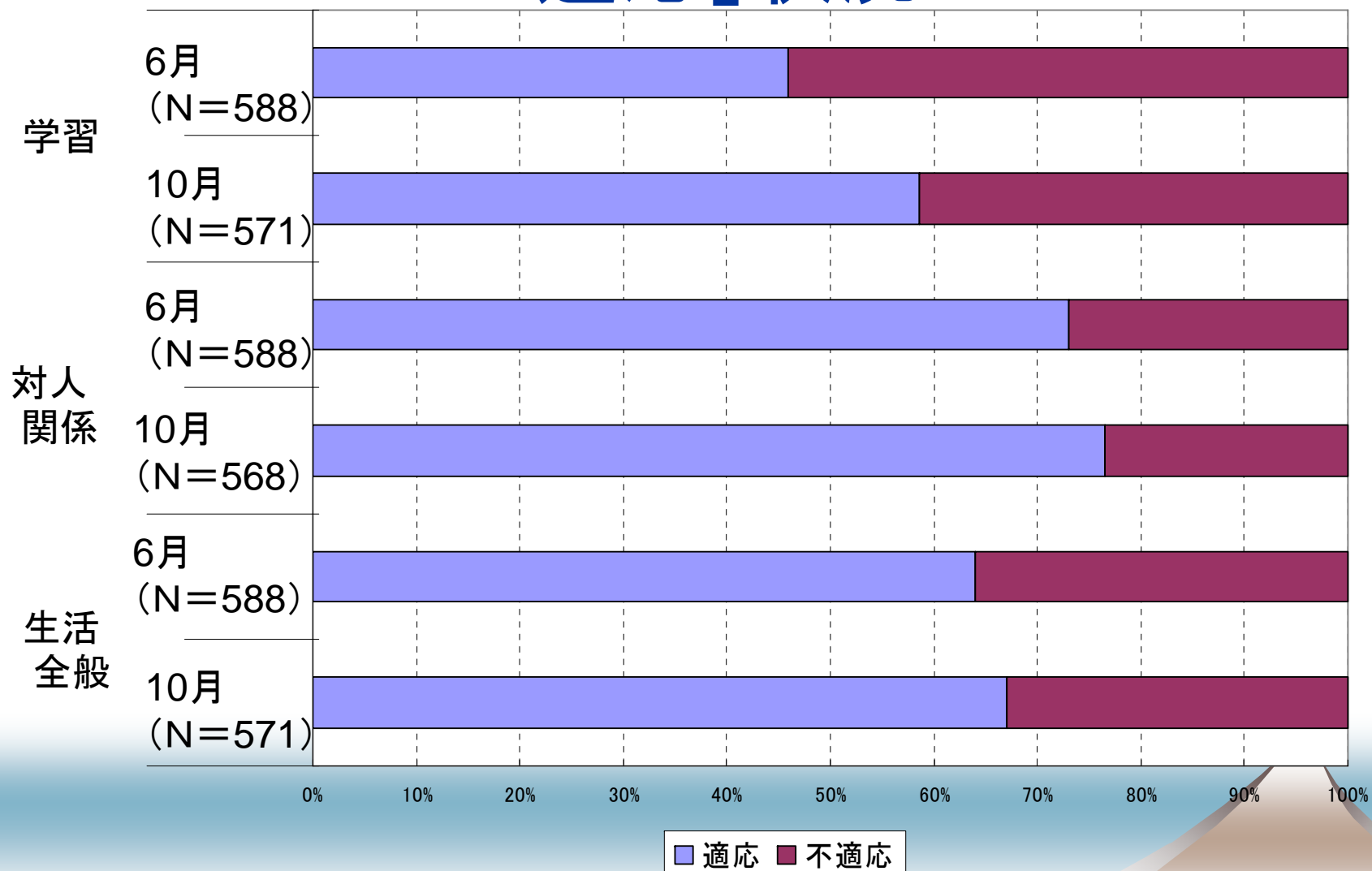
## ◆ 本調査における「適応」と「不適応」

- 学習について
- 対人関係について
- 生活全般について
  - 高校生活 or 大学1年次 と比べて
    - うまくいっている → **適応**
    - うまくいっていない → **不適応**





## 5-2. 高校から大学初年次への 「適応」状況



## 5-3. 高校から大学への適応

- ◆ 学習への適応

4月、6月は5割弱→10月には6割弱

- ◆ 対人関係への適応

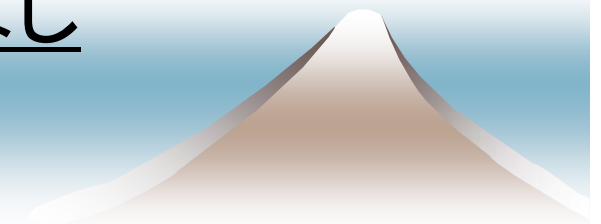
4月、6月は7割強→10月もほぼ変化なし

- ◆ 生活全般への適応

4月、6月は7割弱→10月もほぼ変化なし

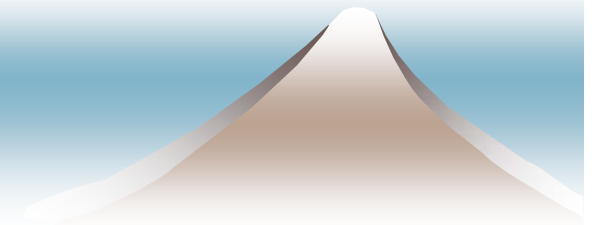
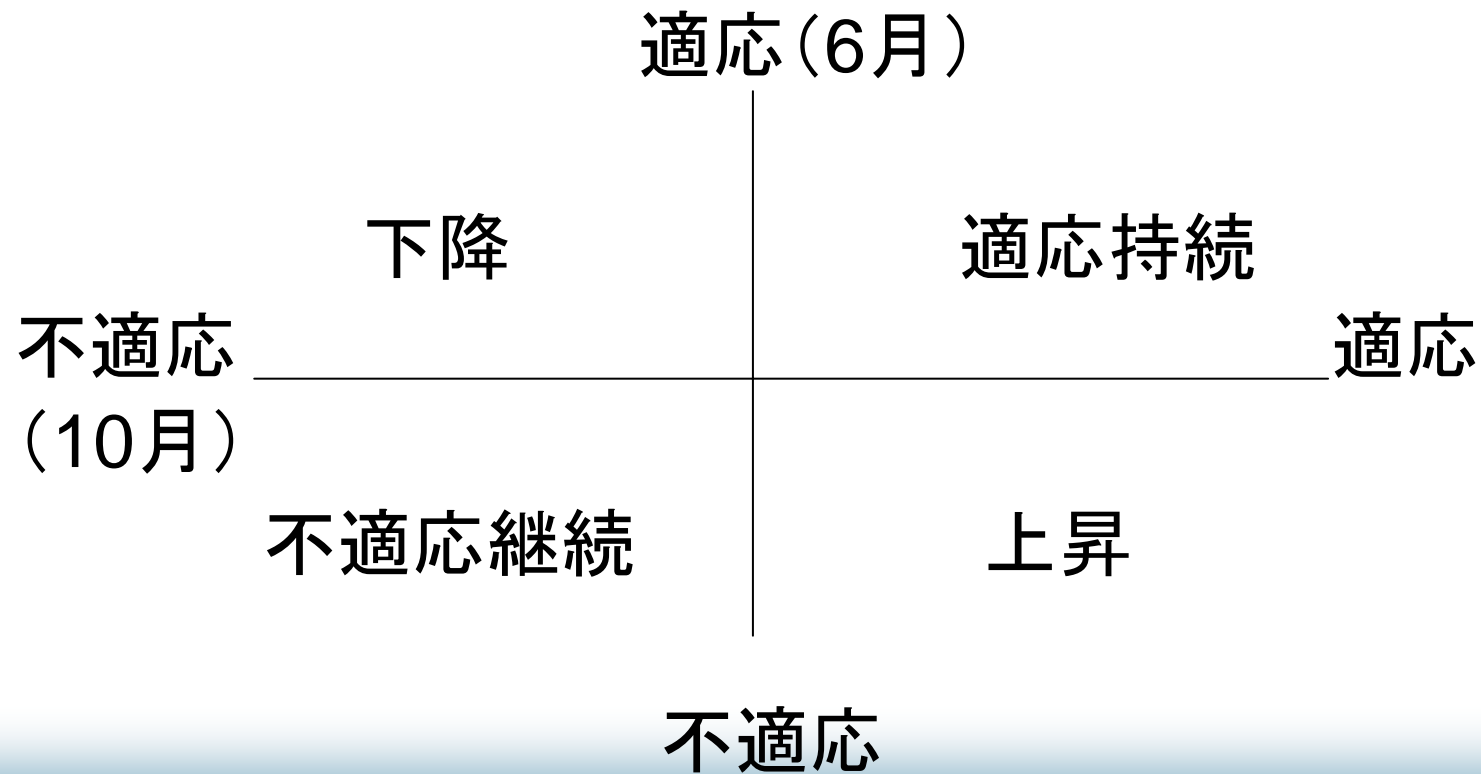
→学習については適応者が増加

対人関係と生活全般は変化なし



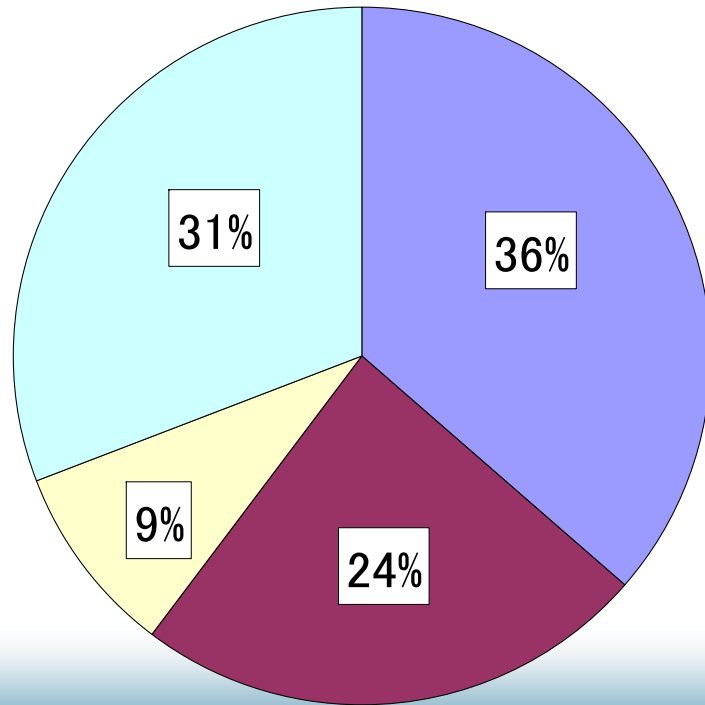
## 5-4. 適応・不適応の時系列的変化

### ◆ 適応状況の変化

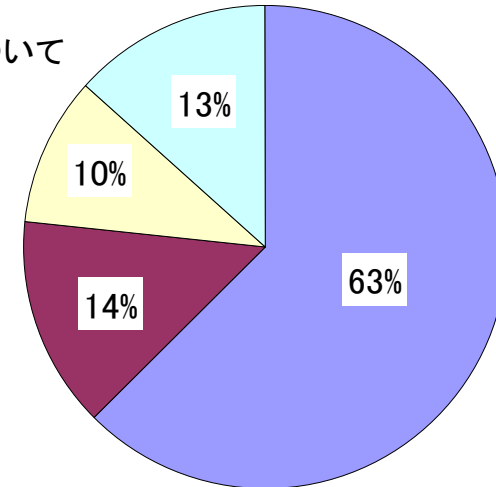


# 5-5. 1年次6月から10月にかけての 「適応持続/上昇/下降/不適応継続」

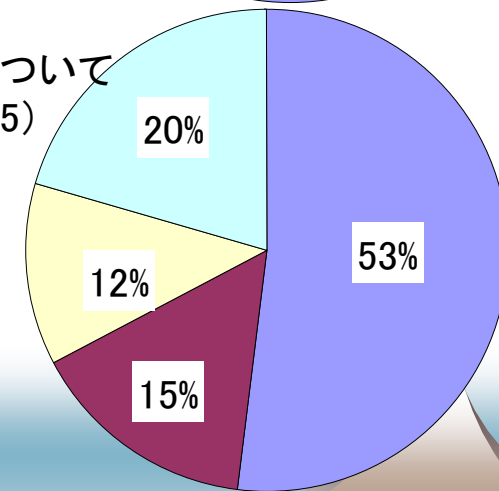
学習について  
(N=457)



対人関係について  
(N=455)



生活全般について  
(N=455)



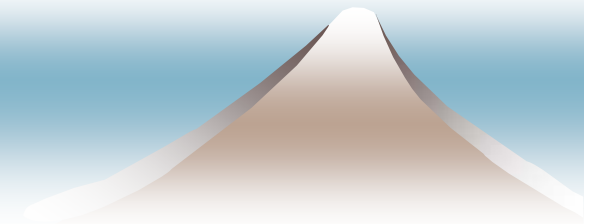
## 5-6. 適応／不適応と属性

### ◆ 適応／不適応の特徴

- 統計的な有意差はみられない
  - 高校成績
  - 居住形態
  - 入試形態
  - 性別

→特定の特徴を有している学生でなく

どの学生にも起こりうる



## 6-1.初年次教育の必要性

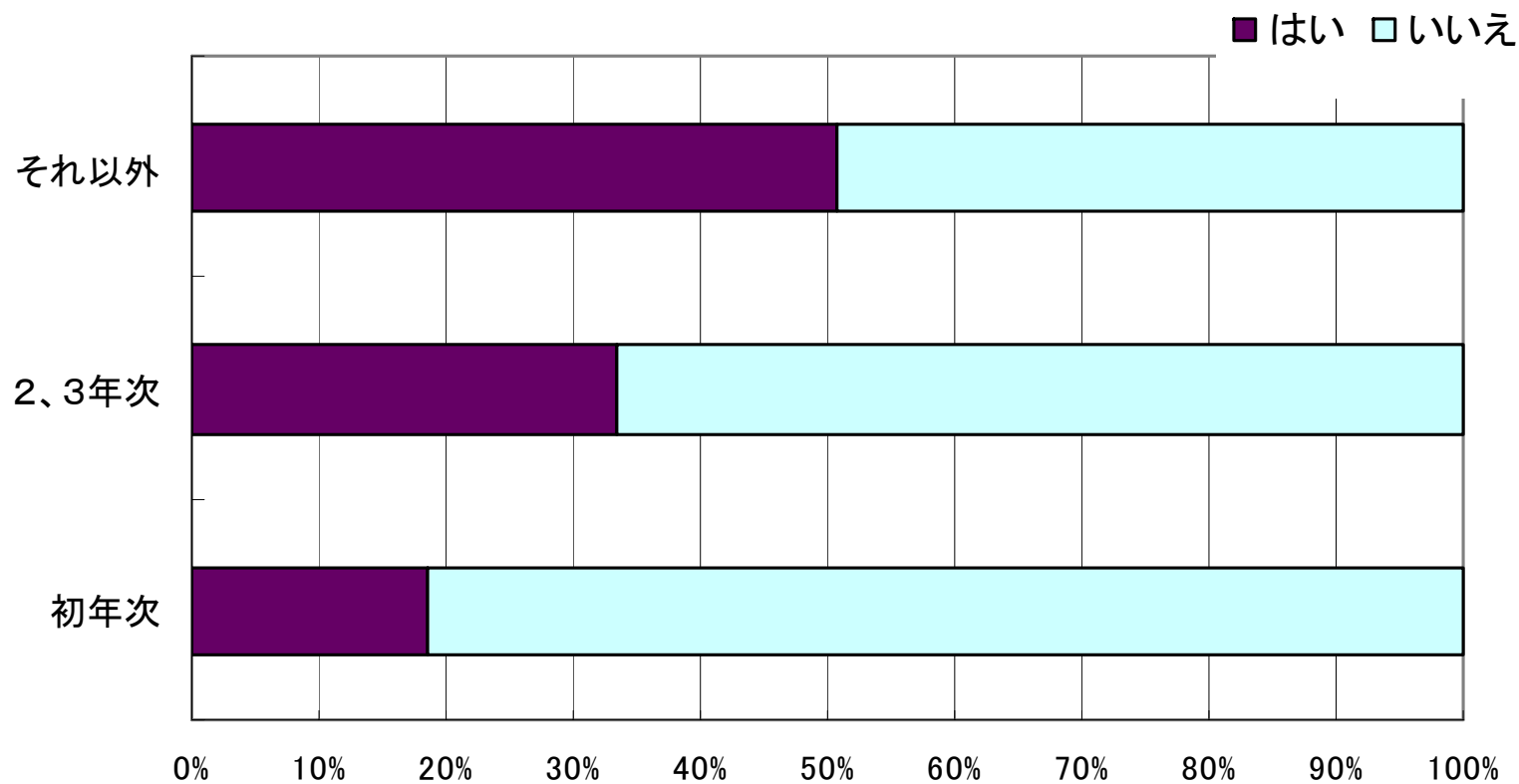
- ◆ 学習面での適応—不適応の分化は1年の4月段階から始まっている
- ◆ 4月段階で「入学して良かった」「大学生活への期待」などの感情をいかに喚起できるかが重要
- ◆ 「対人関係」での適応と「学習面での適応」の相関は非常に高い
- ◆ 学習面と人間関係づくりを、4月段階でいかにサポートしていくかが最も重要

## 6-2. 初年次教育の効果

- ◆ 初年次の適応は持続性がある  
→そのための効果がある初年次教育も有効
- ◆ 早期の適応を持続させることは学生生活にポジティブな影響を与える
- ◆ 学生の個人特性のみが学生生活に影響を与えるのではない
- ◆ 適応の効果は学生生活の時点によってことなるため、初年次教育だけでなく、それぞれの時点に応じた支援が必要である

## 6-3. 適応継続期間ごとの検討(1)

【3年次の経験】大学に行きたくないと思った

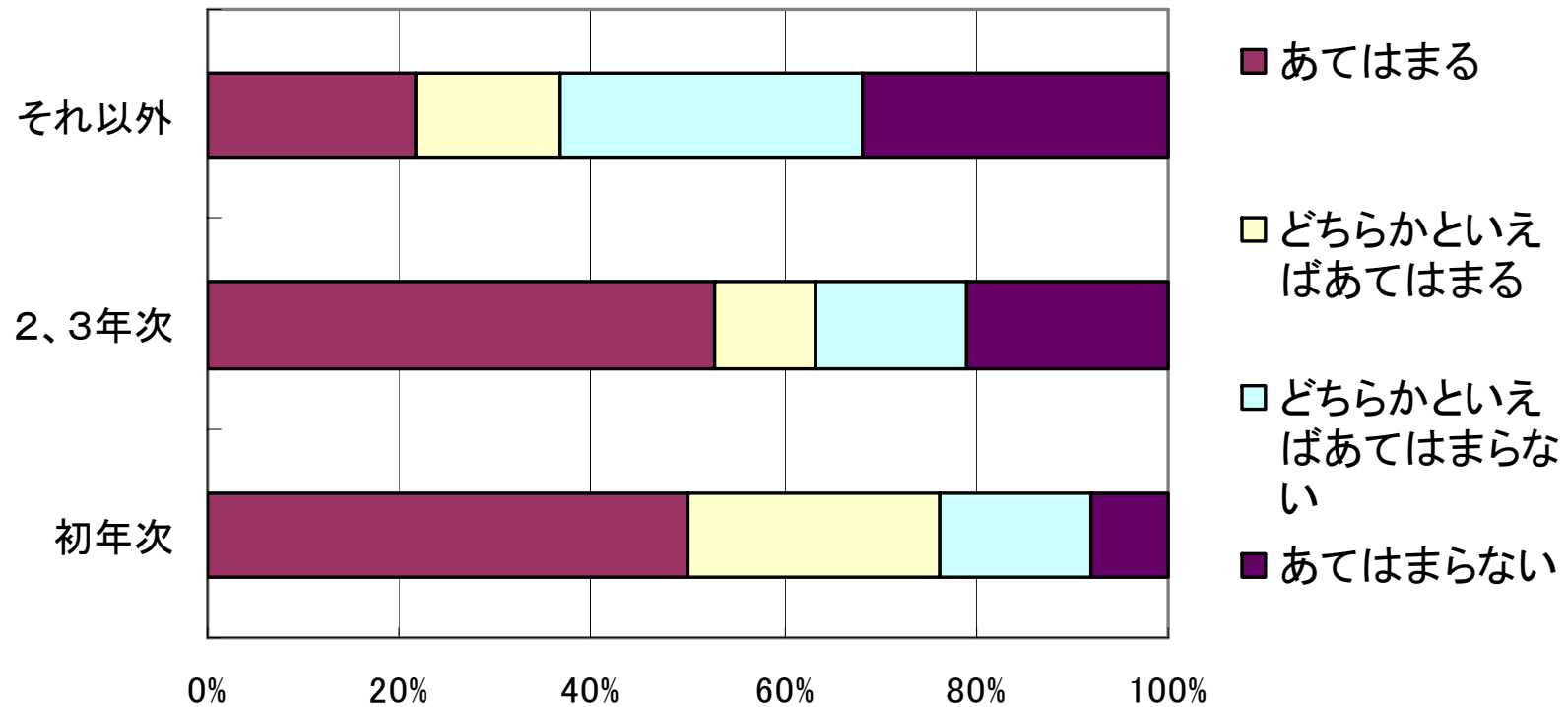


クラスカル・ウォリス検定  $p < .05$



## 6-3. 適応継続期間ごとの検討(2)

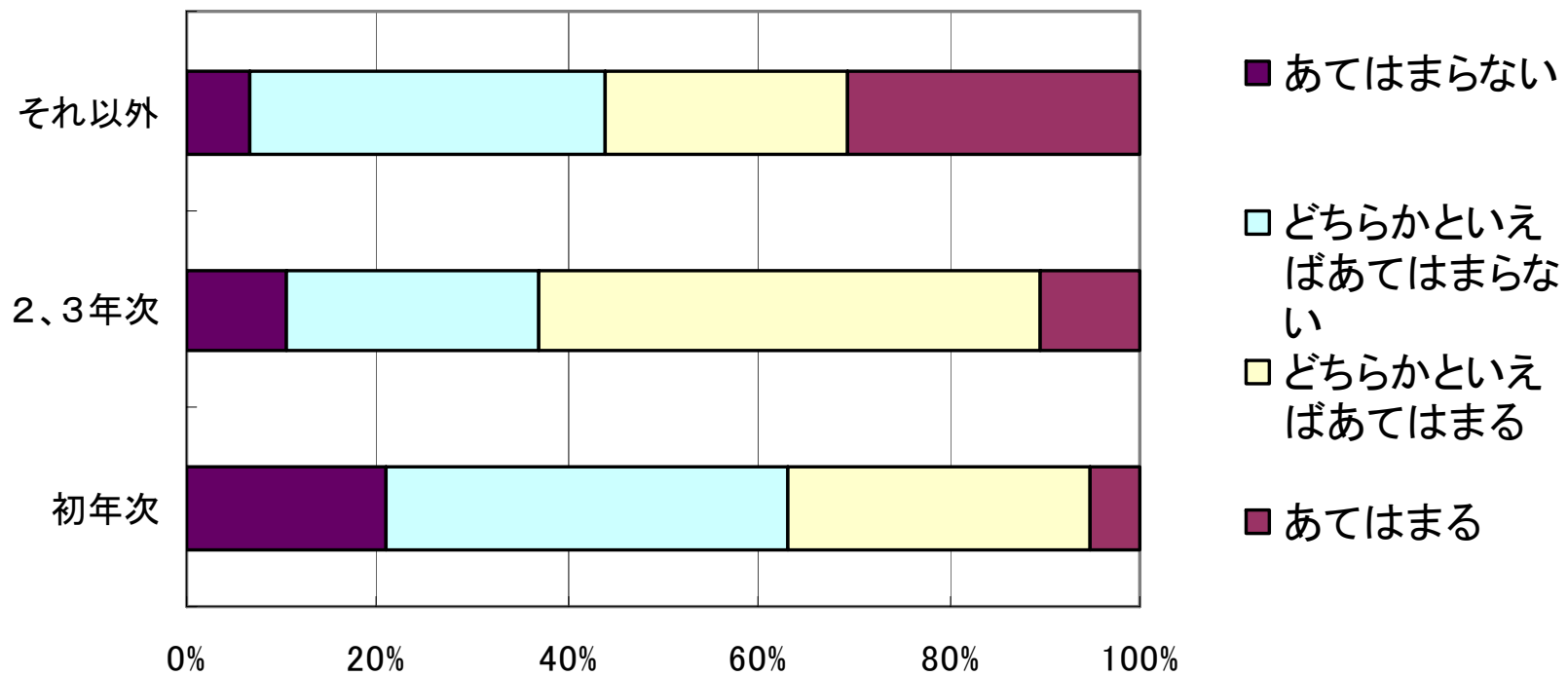
【日常生活と学習習慣】1ヶ月間、無遅刻・無欠席で  
すべての授業に出られる



クラスカル・ウォリス検定  $p < .05$

## 6-3. 適応継続期間ごとの検討(3)

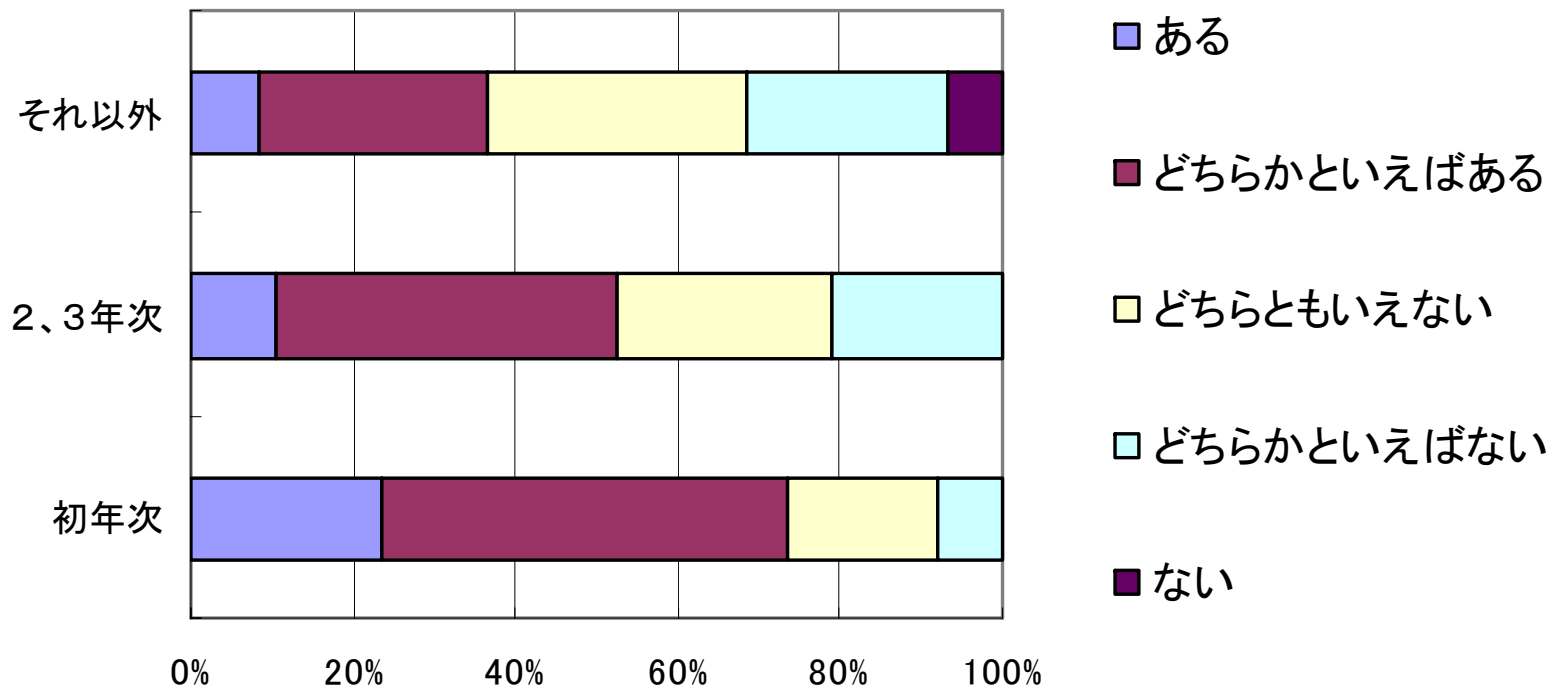
【日常生活と学習習慣】自分で勉強を始めることが難しい



クラスカル・ウォリス検定  $p < .05$

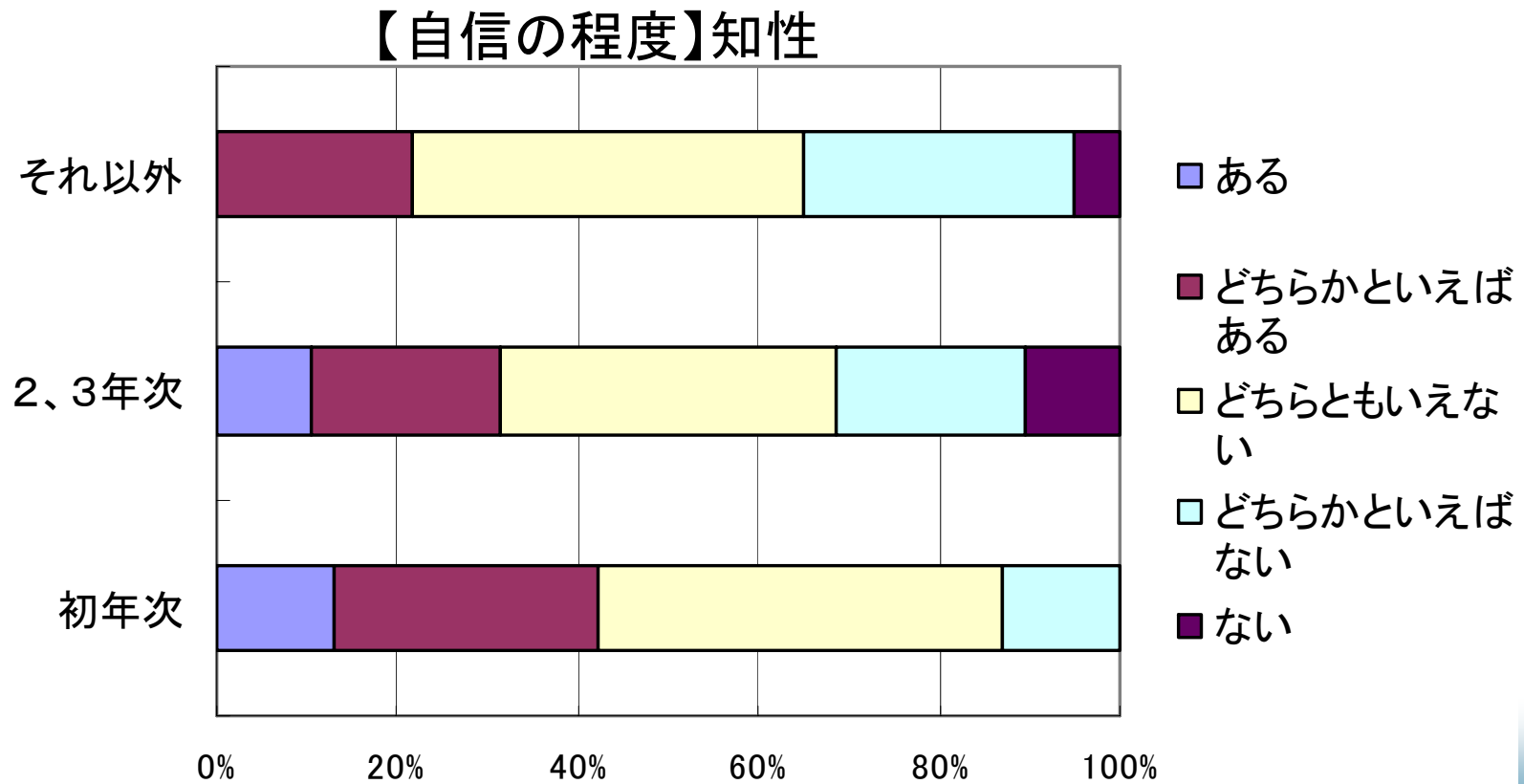
## 6-4. 適応継続期間ごとの検討(4)

【自信の程度】努力をすること



クラスカル・ウォリス検定  $p < .05$

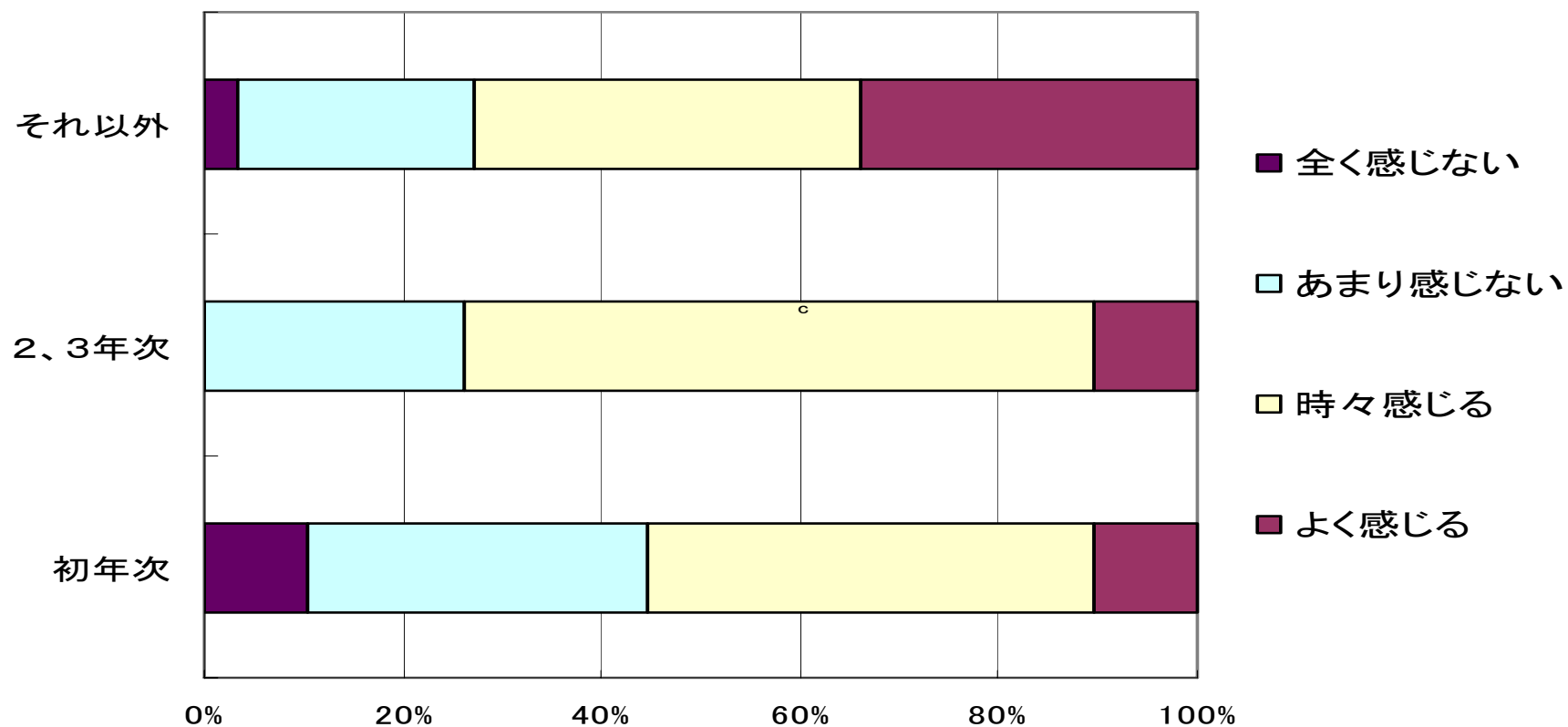
## 6-3. 適応継続期間ごとの検討(5)



クラスカル・ウォリス検定  $p < .05$

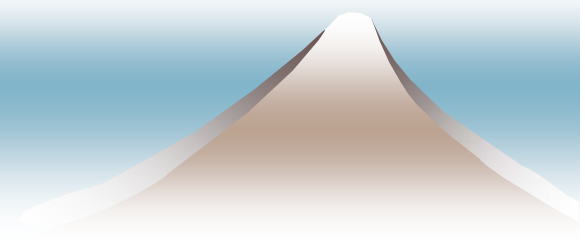
## 6-3. 適応継続期間ごとの検討(6)

### 【悩み】授業が退屈だ



クラスカル・ウォリス検定  $p < .05$

## 7-1. 初年次教育を学士課程教育 に継続していくための課題

- ①教育内容の観点からみた専門教育への接続
  - ②学習動機・目的との関係からみた、卒業後へのキャリア教育との接続
  - ③既存隣接教育プログラム(教養教育等)とどのように連携していくか
  - ④「学士課程教育」と初年次教育の理念的関係と構造化の必要性
  - ⑤担い手となる教員へのFD・ワークショップの必要性
- 

## 7-2. 初年次教育から学士課程 教育の改革に繋げるもの(1)

### 1) 学生自身の自律・自己管理に向けたphilosophy

アメリカでリメディアルが流行らなくなって、初年次教育が注目されるようになったのは、初年次教育でモチベーションや目標が獲得できたら、自発的に勉強するようになるから

### 2) ペダゴジーも含めた教育基準の改良の可能性

Active Learningの手法はどこでも使える

知識の定着+「生きる力」が強調されるようになった  
～学生自身のメタ認識スキルの重視から

“Active Learning”ペダゴジーへ～



## 7-2. 初年次教育から学士課程 教育の改革に繋げるもの(2)

### 3) 学生の発達段階に見合った継続的支援

個々の教員任せでない、職員＝キャリア支援？

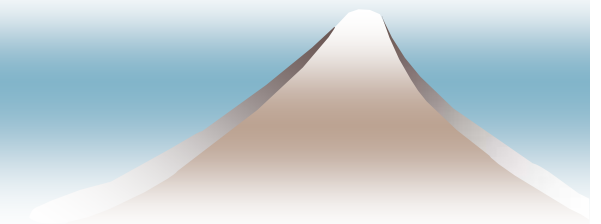
組織的な取組の持つ重要性

cf. シラバス……具体的に体系的に書かれている  
のか？ゴールに到達するためのチャート

### 4) 中長期的視野に立った評価

定量的尺度＋定性的な発達

Outcome評価の為には、目標・尺度の明示が  
不可欠





# 濱名執筆；参考文献・論文リスト

- ◆ 「一年次教育の社会的背景と特徴」『一年次教育と学習支援』関西国際大学高等教育研究所研究叢書No.5、2003年、97-121頁
- ◆ 「日本における初年次教育の課題－大学新生調査結果より－」『平成13-15年度科学研究費研究成果報告書 ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究』、2004年3月、65-84頁
- ◆ 「新生の適応と不適応はどのような経験から生まれるか～学習面と対人関係を中心に」大学教育誌第27巻第1号、2005年5月、31-36頁
- ◆ 「初年次教育からみた教養教育・キャリア教育」大学教育誌第28巻第1号、2006年5月
- ◆ 濱名・川嶋編『初年次教育』 丸善, 2006年11月刊行予定